

『私も結婚したーい！』という叫びから

小山内 美智子 (おさない みちこ)

今年はいちご通信の会費が多い。大変嬉しく思う。43年前の0号から始まったいちご通信は、最初はお役所との話し合いが多かった。リアルにそのままの言葉を書くので、お役所も言葉に気を付けて話すようになってきた。私は録音したテープを聞きながら、左足の親指でひらがな電動タイプライターを使って原稿を起こしていた。

テープ起こしをしていると何を書くかということより、何を切っていくかの方に力を注がなければいけないことが分かった。言葉を聞いていると、輝いた言葉があり「これは絶対削りたくない。」と思った時、どのように原稿をつなげていくか考えた。夜中一人アパートでテープ起こしをするのは快感であった。いちご通信はだんだん評判が良くなり、いちご通信だけで活動費が間に合った時もあった。周囲の人たちもいちご通信は面白いと言ってくださり、色々な方に宣伝をしてくださった。特に浅野史郎さんはいつもいちご通信をバッグに入れ、会った人に「これ、読め。面白いよ。」と言ってくださり、たくさんの購読者こうどくしゃを増やしてくださった。最近はその時のことを思い出し、もっと真剣にいちご通信に本音の言葉を書きたいと思っている。

いちご通信をもっと読んでいただくためには、今障がい者たちが困っていることを書かなくてはいけない。最近考えていることは、地域で自立生活をしている人のことを載せているが、もっと施設にいる人や職員の意見を載せたいと強く思っている。年老いた障がい者の親はケアができなくなり、施設で暮らすほかないと思っている。そういう親たちにもお子さんには選んで生きる場を見つける方法があるのだということをお伝えなければいけない。しかし、このことを言うと「過激な小山内」と言われ続けた。どうしたら施設の人と親と話し合えるのかを考え続けている。これは政治に関わっている人や養護学校ようごがっこうの先生に協力していただかなければいけない。20年ほど前、養護学校に行き、生徒さんたちの前で「皆さんも大人になったら恋愛して結婚もしたいでしょ？仕事もしたいね。」と言うと、一人の女の子が突然泣き出し「私も結婚したーい！」と言った。その時、これこそ私の仕事だと思った。私は今でも彼女の叫び声が耳に残っている。そういう仕事を今自立生活きようりっせいかくをしている障がい者たちが行政と提携し行わなければいけない。地域で生きている人と施設で生きている人の生活の差が付きすぎている。

この訴えを叶えるためには後何十年かかるのだろうか。私は今年で67歳になった。長生きできたことも両親や周囲の皆さんが明るく親切に接してくださったからだと思う。施設へ見学に行っても私の通るところは決められてしまう。施設長や施設の職員、養護学校の先生は、そのことをどう変えていくのか考えて私たちに教えて欲しい。早急に変えていくためには、政治の力が必要なのか。

コロナのことで社会は混乱している。そんな状況のなか、見知らぬ人がマスクや消毒液いしやせいを送ってくださる。「石屋製菓を応援したい」という思いで、白い恋人という

クッキーも一緒に送って来てくださった人もおり、なんとあたたかな人たちがいるのだろうと心が安らかになった。本当にありがとうございました。このような人たちにいちご会が守られていることは大変光栄なことであり、真剣に生きなくてははいけないと思う。

私もどこかに寄付をしたいと考えてネットを見て探した。するとREADY FORという団体を見つけた。(READY FORのホームページ <https://readyfor.jp/>)

そこではコロナの感染防止対策基金を募っていた。良い団体が見つかって頼もしくなった。コロナの感染防止対策基金の説明をよく読んでみると、私の秘書が助成を受ける団体の募集を見つけたので、応募してみようかと考えた。絶対にハードルが高いので受からないと思っていた。しかし、なんと助成を受けられることになった。これから、マスクなどのコロナ対策のものを買いヘルパー事業所の利用者とヘルパーに配らなくてははいけない。たくさん助成を受けることができたので、他のヘルパー事業所にも配りたい。思ってもいない助成金が入った時は横のつながりで助け合うことが大切だということをREADY FORに教えられた。全国の人たちが心をひとつにしてREADY FORに寄付してくださったことに感謝する。

去年災害があった地域に住んでいる人たちの家はいまだにブルーシートが張られていることを知り、私は心が痛くなった。またREADY FORのような団体が生まれ、暖かく暮らせる屋根を作ってあげることができたら良いなと思った。

日本はオリンピックを行うか行わないかで迷っているが、あのブルーシートを見て私はオリンピックに使うお金を災害のために使ってほしいと強く思った。ノーベル賞を取った山中教授は、「コロナは3年間くらい続く、それからまた違うウイルスが出てくるかもしれない」とおっしゃっていた。コロナ対策で買ったマスクは、決して無駄には使えないと思った。地球環境がどんどん変化し、人間は生きにくくなってくるのだろうか。

NHKのドキュメンタリーで、80歳のおばあさんがコロナにかかったが、病院で治療しなくても良いと言われた事実を伝えていた。誰から言われたのか、そこが分からない。国によっては、高齢者や障がい者はコロナの治療はしなくても良いと言っている。残酷過ぎて悲しくなる。そんな中でも医師や看護師は命がけてコロナの治療をしている。彼らは何歳であろうと障がい者であろうと命を救いたいと無我夢中で働いていると思う。

私がもしコロナにかかったなら、もう治療しないで安楽死にしたいなと考えたこともある。しかし、医師たちの真剣なまなざしを見るとこの言葉は言えないと思った。どんなに障がいが高くても「生きたい」と叫んでいかなければならない。そのことが私たちにできる最もふさわしい仕事だ。

あるおじいさんは「人工呼吸器を付けてまで生きたくない」と言った。私は首の手術をした時、人工呼吸器がとても辛かったので、あのおじいさんの言っていることは正しいと思ってしまった。人工呼吸器とは肺の動きと呼吸器が揃わないと苦しくなる。しばらく付けていれば慣れてくると看護師さんは言っていたが、私はとにかく外したくて足の親指でふとんの上に「呼吸器を取って」と何度も書いた。その思い出は忘れられない。しかしコロナを治療する医師たちのまなざしや動きを見て、生きるとは諦めてはいけないと再認識させられた。